

名前	テーマ	今回の気づき
川端渉	内なる音、外なる音 ～感受するわたし～	空間をつくるというところから「つくる」というものには沢山の意味がある事を思い出した。 「作る(make)」は、何かを「作る」意味での作る。小規模なものから無形のものまでの「作る」。ゼロから生み出すという意味の「作る」もあれば、プラモデルのように説明書にそっての「作る」もある。 「造る(build)」は、makeの「作る」と比べると園芸や建物など比較的大規模なものを造るイメージ。個人のキャバを超えているため、組織単位で行うものが多いイメージ。 「創る(create)」は、本当にゼロから何かを生み出すニュアンス。 この他にも、設計(design)や生産(produce)も「つくる」意味とも言える。これらを一つの空間でコラボさせていき、創発的な場をつくり出そうとされている様にも思えた。  音に関して言えば、「聴く」、「聞く」、「訊く」、「唄う」、「歌う」、「謳う」、「吟う」、「詠う」、「謡う」と色んな言葉が出てくる。言葉による意味合いは異なるが、これらの共通項が化学反応させた場合にどうなるのか？など、音への行為体に変容していくのを想起させられた。
川端渉	内なる音、外なる音 ～感受するわたし～	1つ目の「気づき」で、「つくる」「うたう」「きく」について書いたが、日本の空間が「うつ(空)」である事を思い出したので、ここに共有する。 「うつ」はからっぽ、「空」「虚」を意味する。「うつわ」と同根の言葉。器は何も入っていないがゆえに何かによって満たされる。すでに満たされているなら、新たなものを入れることは出来ない。「うつ」もまた、何も入らないがゆえに何かで満たすことが出来る。 「うつ」は「うつろひ」の語源。「うつろひ」はさらに「移る」「映す」「写し」へと展開する。「移る」とは変遷、固定されない。「映す」は別の何ものかを映しだす。そして「写す」は「映し」だされたものを何らかの方法で定着させる。これら言葉は意味は違えど自在な可能性を示している。「うつ」で言うなら空虚なものもつ、自在な可能性。 「うつ」なる空間に何か「うつろひ」、そして「うつつ(現)」、それは現実が生まれることかもしれない。 同じ読み方をしても意味や感じ方が変わる。言葉とは不思議な「いきもの」だ。
川端渉	内なる音、外なる音 ～感受するわたし～	安澤太郎さんの話し中で、記憶に残すためにきれいにしすぎない。どんだけ歪んだ点を増やすか。 とあったが、これは日本の「仮設空間」に関係する事と感じた。「仮設空間」は、カミの場、あるいは生命の復活の場。これはその自在な仮設性によって、どこにも出現する。仮設することでつねに新しいものとして存在。日本の空間が固定化を嫌うのは固定されたときから腐り、朽ち果て「死」を迎えるから。 「いま」という時間と空間を大切に考える。こうした生活態度は日常空間にも色濃く反映され、日本の音楽産業がパッケージで特化することにも反映されているのかもしれない。日本人の空間をとらえ方として生き続けているのかもかもしれない。
村瀬朋桂		安澤太郎さんのお話を聞いて、ヒントがたくさんありすぎて、まだまだ情報を整理できていませんが。 私自身、漠然と音楽をもちいた場づくりに興味があるので、今回のお話はとても楽しくワクワクしながら聞いてました。 その中で、一番最初に安澤さんがおっしゃった「来場者がフェスとつくる」という言葉が一番に残っていて、自分のテーマが見えないのは、自分からみた音楽だけで何かしようと考えていたからじゃないか？と気づきました。今更といった感じですが、すごく狭い視点で「場をつくるってなんだ？」と考えていたことが、話を聞きながら、なんだかとても恥ずかしくなりました。 場をつくるってことは、そもそも一人では無理で、来場者、出演者、地元の人、会場の人など、たくさんの方が関わります。その一人一人がどんな状態にいることが理想なのか、そういう状態になるには何を仕掛ける必要があるのか、そういうたくさん視点で場を考えて行けば、少しずつテーマが見えてくる気がしました。まずは、それを整理しようと思います。 あと安澤さんの資料がすごくわかりやすくて、「どういう状態を目指しているのか」。ちゃんと自分の考えを整理して見えるように、説明できるようにしておくことは大事だと実感しました。
桐明紀子	音楽を“起こす”場をつくる	・フェスを行う際の少子化の村やお客さんと安澤太郎さんのコミュニケーションの考え方が印象深かった。特に「対立構造は大事」というのは考えさせられた ・フェスに出演するアーティストが様々な実験的な表現を実現していた ・技術的に優れているものをただ見せても面白くないのでエンタメに落としこむ必要がある ・フェスなどはトラブルや困難があった方が記憶に残るので整え過ぎない(Re-Born Art Festival参加したときに同じことを感じた)。安澤さんの音楽フェスを写真などでアーカイブしていく試みや演者とお客さんが一緒につくっていく試み、はアートに通じるものを感じた
蟻川小百合	音楽と人との関わり方を変化させることで、社会にどのような変化を起こせるか？	安澤太郎さんのこれまでの活動の話を知っていると、「開くこと」を積極的にやってきた人だと感じた。「ルールはお客さんがつくる」と言うのもその姿勢の顕れだと思われ、開かれているからこそ、良い意味だけではない様々な接触があり、そこに社会の縮図的なものを観ていた。人と人との関係はもちろん、芸術と社会の関係も、自分がつくり出すフェスの世界の中で観てきたのだ。 安澤さんの新しい活動は、「自分たちの場所」ができることによって、「閉じている」部分も含む日々の創造と、それらの蓄積が可能になっていくのではないかと感じる。話を聞かせてもらったこちらもワクワクできる。どんなことが起こるだろうか？ スピードと成果だけが求められる現在の世の中で、文化芸術の評価もまた同じ軸で捉えられがちなことに私自身も疑問を持っており、安澤さんが今までの10年からこの先の10年を見据えてスタートを切ろうとしている姿にはとても勇気づけられた。その時でなくとも、後からでも「あれはすごかった」と思われるようなことをやりたい、ということを知っていたのも印象的だった。私も、小さなことからでも、やらなければ、その先に進むことができない。実践すること、そこから学ぶこと、活かして次に進むことの大切さも、改めて胸に刻まれた。
杉原環樹		安澤太郎さんが主催してきた音楽フェス『TAICOCLUB』には、2013年と2014年の二度にわたり参加したことがあった。参加の理由は、単純に音楽でも聴きながら友人らとのんびり過ごしたいというもので、ほかにもいくつかのフェスに行ったことがあるが、どのフェスにも同じ動機でしか参加したことがない。つまり、自分にとって音楽フェスとは、お金を払えば参加することができる、日常から一時的に逃避するための「点」としての非日常空間であり、継続的な時間軸や、周囲の土地との面的な広がりがあるなかでそれを考えたことはなかった。 だから、主催者の感覚として言われてみれば当然のことでもあるが、安澤さんが長い時間のなかで土地の人との微妙な距離感を測りながら「TAICO」という祭りを動かしてきたというお話は、ただそれだけで、新鮮なショックを受けるものだった。「お金を払って参加する消費の場」。そんな風に無意識に考えていた場所は、本当に文字通りの「お祭り」として、具体的な土地や人との関係性のなかで維持されていた。そのことを、いまさらのように感じたからだ。  こうした側面はどのフェスにもある程度共通しているのだけれど、今回、数あるフェスのなかでも清宮さんが安澤さんの取り組みを紹介したいと考えた理由も、お話を聞くうちにすこし見えた気がした。一言で言って、「TAICO」の運営にあたり安澤さんが大切にされてきたいくつかの視点は、清宮さんが現在取り組んでいる「アートプロジェクト」という営みとも非常に近い性質を持っている、そう思えたのだ。 たとえば、「Too Much Trouble」という言葉で紹介されていた、フェスの会場を「なるべく便利にしすぎない」ことの大切さや、「違和感や嫌な部分が残っていない」と記憶に残らない」という哲学。これは、経済合理性を重視する音楽産業の世界からやってきた清宮さんが、アートプロジェクトに関わりながら学んだとインタビューで語られていた、「(安易にイベントに)まとめないこと」や、「(結果を先読みせずに)リサーチに長い時間をかけること」ともどこかつながる要素だろう。 あるいは、「Brewing」という言葉で紹介されていた、共通のものを介して知らない人同士が混ざり合う感覚は、「ほくさい音楽博」や「エレクトロニコス・ファンタスティコス！」における、子どもと講師の関係、音楽家と地元の人々の関係にも当然共通するものだ。  こう考えたとき、そもそもそうした性質を持っていた「TAICO」での活動を終え、安澤さんが新たに始めようとしている取り組みが、「ケのなかにハレを入れていく」や「消費価値から蓄積価値へ」というように、これまたアートプロジェクトに近接する性格を感じさせるのはごくごく自然なことだろう。 そのビジョンの具体的な現れは、いったいどんなものになるのだろうか。それは楽しみに待つほかないが、今回のお話を聞き、こうした志向性に基づく動きが、日本有数のフェスの担い手だった安澤さんや、清宮さんのような重要なプレイヤーたちから同時並行的に出てきているという状況は、音楽をめぐる現在時の変化としてとても興味深いものであると感じた。
宮内俊樹	時勢を読むセンスと、音楽を「自由」にすること	ちょっと今回からは長い文章、散文にまとめていきたいと思っていて、まだできていない宮内ですが、必ずやります(公言)。 安澤太郎さんの柔軟さにまず驚きました。考え方も風情もとてもフランクで思考が柔軟、そしてこれまでTAICOで実践してきたノウハウがたくさん詰まっていて、かつそれが体系化され、わかりやすい形にまとめられている。それはまるでひとつの「マーケティング論」だといっていいと思うほどに、完熟しているので学びが多い。 たぶんこれを読んでコミュニティ形成に役立てることも相当あるはず。 ただ、それ以上に貴重なのは、そうしたマーケティング視点がよくあるビジネス書やビジネス記事の類とはまったく違ったもので、安澤さんの体験から感じられる「センス」に基づいていること。そしてそういう「時勢を読むセンス」というのは、個人の違和感やズレを起点にしたリアリティを獲得し、他者とコミュニティで分かち合うことで価値を相対化し、そしてクリエイティブに形にしていくことで人々の心をゆさぶるものにつながる、と。 それってある意味、アートであり音楽であるなと思いました。 そうした「時勢を読むセンス」は、現在の社会で音になる風景をクリエイティブしたり感じたり観賞していくときに、とても強い武器になると思う。